

平成30年度第1回小田原市青少年問題協議会 会議録

- 1 日 時 平成30年7月5日(木) 午後3時00分～4時40分
- 2 場 所 小田原市役所 議会全員協議会室
- 3 出席者
 - (1) 委 員 加藤憲一(会長)、橋本輝夫(副会長)、荒井範郎、石井政道、石幡保雄、磯田待子、稲毛真弓、江島紘、大場得道、川瀬貴美子、小林俊之、下田成一、杉本聡、鈴木修一、立花ますみ、星賢一、眞壁誠一、宮川晃、和田重宏
 - (2) 事務局 北村子ども青少年部長、中津川子ども青少年部副部長、吉野青少年課長、笹井青少年課副課長、秋澤青少年課副課長、福田主査
- 4 議 事
 - (1) 平成30年度青少年関係事業について
 - (2) 意見交換
 - (3) その他
- 5 会議の概要

(1) 平成30年度青少年関係事業について

事 務 局

資料1「平成30年度青少年関係事業」について説明。

青少年団体育成事業 / 子どもの居場所づくり推進事業 /
青少年環境浄化推進事業 / 青少年健全育成支援事業 /
青少年指導者育成事業 / 体験・交流学习事業 / 青少年相談事業

会 長

平成30年度青少年関係事業について、事務局から概略を説明させていただいた。ご質問やご意見があればお願いしたい。

(質疑応答なし)

会 長

特に意見等ないようなので、平成30年度の青少年課行事につきましては、今説明のあった内容でしっかり取り組んでいただきたい。

(2) 意見交換

会 長

議題の(2)意見交換については、「青少年の育成、将来に向けいま何に焦点をあてるべきか」というテーマで事前に通知させていただいている。1時間余りの限られた時間だが、忌憚の無い意見をいただきたい。それでは、事務局から今回のテーマについて説明願いたい。

(事務局説明)

会 長

今回の意見交換は、4年後に18歳で成人を迎える現在の子ども達に対し、大人としての自覚・責任を持って社会に飛び立てるようになるためには、今から何をすべきかということについて、学校や地域などにおける青少年を取り巻く環境の現状と育成の取り組み、さらに、今後に向けての問題点や課題の洗い出しをしたいと考えている。今日この場で結論まで求めるものではないので、現段階での取り組み、それぞれの団体で考えていること、また、今後への懸念や取り組むべきことについて率直にお聞かせ願いたい。

それでは、まず、学校における子ども達を取り巻く環境やそれに対する取り組み、また、今般の成人年令の引き下げ等に対する受け止めや、今後に向けての活動についてお聞かせ願いたい。

宮川委員

子どもを取り巻く環境について、現状感じていることは、子ども達あるいは家庭の様子を見てみると、家庭環境と地域環境について二極に分かれてしまっている。多くの子どもは、適度に大人に、保護者や地域の皆さんに守られて育っていると感じている。ただ、その中の一部の子については、過保護になり過ぎて守らなければならないという意識が強過ぎる。また、それとは反対にネグレクト傾向の家庭もあって両極端になっている。そうした家庭は、保護者同士あるいは地域の中でも孤立している傾向があり、そうしたものを打破していかなければならないと学校現場では感じることが多い。

それから、SNSの関係で、例えばYouTubeに投稿したり、YouTuberを目指すのは構わないが、他の子の情報を含めて投稿して楽しければ良いという風潮が見られる。あるいは悪い情報まですべて自分にとって良いものとして考えてしまっているのか。例えば、リストカットまで自分で試しにやってみたというように、悪い方向悪い方向に出してしまうことが見られる。そうした情報を正しく理解していくように進めていかなくてはならない。

ちなみに本校のスマホや携帯の所持率は、小学校1年生で9.5%、高学年になると50%を超えて最高59.5%である。もちろん、学校内では使えないので、放課後や夜に利用していることになるが、利用については、学校として規制もしていかななくてはいけないかなと思っている。具体的な対処の仕方としては、教室等を開きながら効果を分析し、工夫しながら取り組んでいきたい。

会 長

新玉小学校区はコミュニティスクールを市内で最初に導入していただいた。家庭や地域の環境という意味では、地域の方で比較的子ども達の様子を気にして関わっていると思うが、そのあたりの問題の共有とか、スマホの件とか、保護者の方とどういうふうになっているのか。

宮川委員

例えば、子どもを見守るという点では、児童見守り隊というものを編成して、地域ごとに出てくださいというだけでなく、学校として、どなたがどの辺りにどのように見守っているのかを把握しながら進めている。しかし、本日、民生委員さんが集まった会議での意見としては、見守ってはいるが、児童数の減少とともに児童が余りいない。放課後に遊んでいる姿がなかなか見られない。だから言葉をかけにくい傾向にあるとのことであった。

現在は、授業参観の際に学校説明会という形で、現状を保護者あるいは地域の方に話しをしている。もちろん学校でもホームページなどで現状を伝えながら、心配な点をできるだけ情報共有してもらいながら進めている。ほぼ90%以上は安心して大きな心配はないと思うが、現在通学している191人の児童のうち一人でも何かあったときには、私達は全て責任を持って対応していかなくてはならないので、そうならないための手立てを考えていく必要がある。

191人いれば191人すべての子どもが、安心して安全な学校生活が送れるようにしていきたい。

会 長

中学校はどうか。14歳が在籍しているということも含めて現状についてお聞かせ願いたい。

石井委員

子ども達に「煙草を吸っていい年齢はいくつ」と聞くと、意外と18歳と答える子が多い。お酒も同じような感覚で、今回の法改正ではその部分が20歳となっているが、子ども達からすると18歳という年齢は節目の歳という受け止め方をしているように感じられる。それがどういうふうに関心してくるのかということは、あまり意識はなく、責任もついてくるので良いことばかりではないとは思っているように感じられる。

学校で今はやっているのは選挙である。生徒会選挙などで、市の選挙管理委員会からいろいろ協力、指導を受けながら、衝立みたいのを借りて行っている。市内どここの学校でも行っていて、選挙管理委

員会から講師を招いたりして、選挙については意外と生徒も意識している。また、うちの学校では昨年度から不在者投票をやってみようと、不登校の生徒の家に担任が行って投票用紙と名簿を配って投票してもらったが、家庭まで行くのは教師も生徒も負担が大きいということで今年はやめた。いずれにしても、責任がそれだけあるということ、子ども達に漠然と分かる様な形で取り組んでいる。

また、学校で先生方と話しをするが、一つは、地域の活動に子ども達は意外と参加しているが、いつも同じ子が出ているのではないか。もしかすると限られた子達だけなのではと。私が子ども達に伝えているのは、「いずれ君達はこの地域に戻って来るんだよと。君達も同じようにやれると良いね」と。

二つ目、これは職員に言うのですが、今の子ども達もアピールしたい気はあるが自己肯定感が低いと。先生やお父さんお母さんがほめるのも良いですが、第三者からほめてもらう場面を作ろう、それは、地域の人である。だから第三者という言い方は変ですけど、地域のおじさんやおばさんから、「ありがとう」とか「ご苦労さま」とか言われると、もっと生徒は張り切って頑張る。

「見て見て」という自己PRは強いが、自己肯定感を高めるためにどのような手立てがあるのか。それは、地域に出て、自分達が手伝えることをやることで、地域の一員になっていくんだということを中学校で覚えてもらいたい。このようなことは、各中学校でそれぞれ取り組んでいる。ただ、土日の職員の出勤は、働き方改革とのバランスもあって難しいが、少しでも地域に出て子ども達をほめてもらおうと、地域の活動に積極的に取り組んでいる学校が多くなっている。

今後の課題で感じるのは、非行の相談のケースが、これまでと比べて随分減ったということ。昔は反社会的な相談、今は非社会的な不登校であるとかいじめとか、いじめが非社会的であるかどうかは分からないが、さらに、虐待とか、そういう相談が多い。警察の会議でも言ったが、SNSの問題は、本当に真剣に教育界で対応しなくては手遅れになってしまう。しかし、その手立てをどうすれば良いのか。神奈川県はLINEの会社と手を組んで取り組み始めたが、何かやらないと、どんどん低年齢化して、言葉は悪いが諸悪の根源みたいなものになっている。私自身もスマホを持ってるしSNSもやっている。確かに便利だが、そろそろ「学校への持ち込み不可」だけを言ってる場合ではないと正直感じている。最近、いろいろな会合に出てSNSの間

題について言うと、今年は昨年よりもはるかに「これはなんとかしないといかん」と、皆さんも受け止めているように感じる。

会 長 SNSの問題、色々なことが関わると思うが、例えば具体的にこういうことというのはどうか。

石井委員 県ではSNSの教室を開催したり警察でも開催している。正直、子ども達のしていることは我々には分からない。もっと身近な人を講師に招いて一緒にやるとか。また、例えば行事に参加するとポイントがもらえとか。昔、小田原でカードでポイント集めてというのをやっていた。あんなふうなことが、今度は携帯でできるようにとか、そういうことを通して、何か子ども達がアイデアを出して良い使い方を広げていけないかなと思っている。

会 長 地域との関わりやSNSについて、小田原東高校の先生がいられるが、年齢的に一番近い当事者として、どんなふう感じているのかお聞かせ願いたい。

立花委員 去年、座間の事件が起き、高校生も巻き込まれて命をなくすということがあったので、高校は非常に敏感になっている。今の子ども達は個人情報全く何の抵抗もなく外に出してしまう。そこに顔が映っている、名前が出ている、あなた方は全世界に自分の個人情報を流して良いのかと。はじめてここで子ども達は「はっと」する。

SNSの使い方の指導はどここの学校でもやっている。ちょっと前までは、携帯電話会社に依頼し携帯電話教室というのを行っていたが、結局は電話会社なのでプラス面も言ってしまい、子ども達の中にはさほど危機感は生まれない。今、非常に問題になっているLINEについては、LINEの会社の人に話をしてもらい、生徒に意識を高く持ってもらう形に流れてきている。ただし、今後は、もう少し子ども達に正しい使い方について、切り込んだ指導をしていかなければならないと思う。

また、警察でもパトロールをしていただいて、民間のサイバーパトロールなども学校に直に連絡をくれることがある。「今、あなたの学校のこういう生徒は、こういう動画を流しています。」ということが分かる。

そういうことも警察はかなり把握している状態なので、警察との連携を取り合いながら、例えば警察官に指導に来ていただくこともあるかなと思う。

SNSのトラブルがいじめの問題になったり、色々なことが次から次に情報連鎖しているので、SNSについては、口をすっぱくして、始業式や終業式などの際、必ず一言入れる形で生徒に指導している。

そういう機械を通してのコミュニケーションが、今の子ども達のメインになっている中で、どこの学校も不登校者を何十人と抱え、その子達が成人を越えて30年、40年引きこもりになっていくことが、将来非常に心配である。

そういう現状の中、子ども達がどんな問題を抱えているかというところ、一つにはコミュニケーションの能力が低いという面。もう一つは、これは、前任の校長が話していたと思うが、貧困の問題なども関係すると思う。例えば、就学支援金という制度がある。その手続きができない、申請書類をどうやって書いていいかわからない。1対1で「こうだよ」ってやらないと親が分からない。もっと言うと、入学手続きのときに「こういう書類を持って来て」と説明しても、白紙で持って来てその場で書かないと分からない。また、大学入学後の奨学金の手続きに関しても、印鑑は印鑑登録したものが必要と説明したにも関わらず、全然違う印鑑を押してきて書類が整わない。助けてもらわなくてはいけない立場の家庭が非常につまづいている状況にある。私が小田原地区の学校をここ何年か勤務して非常に強く感じているのは、親の教育力とか理解力というところに、子どもが巻き込まれてつまづいてしまっていること。そういう家庭の将来は非常に大変である。

ただ、うちの学校に限って言えば、ご存知のとおり、小田原城東高校、小田原総合ビジネス高校、小田原東高校と校名は変わったが、商業科の生徒が半分ということで、就職志向の生徒たちが非常に多く地元志向である。やはり、生まれ育った地域に貢献したいという気持ちが大変強く、地域との活動にはとても積極的で、吹奏楽を中心にとっても良い活動をしている。

青少年関連事業の中の「地域の子ども活動情報発信支援事業」について、山王・網一色地区が今年度から実施ということで、早速、地域の方が本校を訪ねて来て、素敵なチラシを作ってくれた。本校には「城湯屋」という高校生のショップがあるが、その開店記事なども載せてもらった。これまでも地元地域とは防災面などで強い繋がりを持ってきてはいるが、新たな局面に向け、良い関係作りができつつある。

最後に、学校として何をしているかという点、我々は色々な家庭を生徒を通して見ているが、その生徒の困り感について一番繋がりやすいのは、保健室であったり学校に来るスクールカウンセラーである。スクールカウンセラーに繋ぐと親にも繋がって突破口が見えたり、また、高校にはスクールソーシャルワーカーが在籍しているので、そちらに繋げたり、18歳に達していない子については、児童相談所に対応してもらったりと、色々な機関と連携しながら問題に取り組んでいる。

会長

成人年齢の引き下げについては、高校生達はどんな受け止め方をしているか。

立花委員

一人ずつ聞いたことは無いが、先ほど話のあった選挙については、意識はかなり高い。選挙などで動き始めているので、大きな変化としてとらえていない気はする。

会長

今、小中高それぞれの先生からお話を伺うと、社会性を育みにくい環境の中で非常に苦労され懸念されている。そういう中で、地域の皆さんとの関わりが重要ではないか、地元志向も強いので、そういったところで繋がっていければと。また、もう一つはSNSが重要な問題となっている。これらについて、地域の自治会長がいられるが、子ども達との関わりを持っている中で、どのように感じているかお聞かせ願いたい。

石幡委員

青少年問題について感じているのは、従来の非行型、いわゆる万引きや自転車泥棒とか、そういうものを非行としてとらえていたが、先ほどの先生の話でもだいぶ非行が減っているということで、問題点や論点が変わりつつあるのかなと。

そういう中で、最近の凶悪事件の傾向を見ると、多感な時代の10代ぐらいのときに引きこもりだったり、家庭内暴力だったり、そういうことを実際の生活の中で体験してきている者が、20代の前半ぐらいで凶悪な事件を起こしているという傾向があると私はとらえている。引きこもりであるとか、社会生活にうまく対応できないという経験を、地域も含めて我々がどういうふうにとらえて、どう支援していくのか、大きな課題である。

会 長

今までの、比較的分かりやすい、外見を見て分かりやすい非行のケースから、内向化してるところに、地域がどう関わられるかが問題だ。

下田委員

私の桜井地区は、小学校が桜井小学校と報徳小学校、中学校が城北中学校で、高校は県立の城北工業高校があるが、校長先生も含めた各学校の先生方と、地域で子どもを育てるということで意見交換会とかを頻繁にやっている。なるべく地域の活動に子ども達も一緒にということで、「クリーンさかわ」とか、以前の「健民祭」、今はオープン参加の「スポーツフェスティバル」に形は変わってはいるが、この役員とかを中学生の陸上部員にやってもらっている。

桜井地区だけではないが、小田原市は「まちづくり委員会」というものを進めていて、子ども会、PTA、育成会、社協、民生委員などが入っている。しかし、それぞれの部会をやっていて感じるのは、あくまでも大人が作った組織で、例えば青少年育成会については活発に活動はしているが、その中には子ども、例えば中学生は入っていない。活動自体は一生懸命にやっているが、大人目線というか、本当に子ども達に必要なことを吸い上げて活動できているのか、これからはそういう点も考えていかなければならない。

また、城北工業高校から、定時制を持っているので食堂があるが、利用する方が少なく地域でも使用してはという提案があった。高校側からは今すぐ具体的な企画はないが、例えば地元のお年寄りが高校の生徒と一緒に昼食会をすとかできたら良いと考えている。

桜井地区は二宮金次郎先生の生誕地で、桜井小学校では、学校の教育の中で金次郎先生の「教え」を広め、城北中学校でも同じようにしているが、中学校で切れてしまう。その後に繋いでいけるよう、高校との連携を図りながらうまく取り組めたらと思う。

会 長

大人目線ということで、大人の側では地域の方に何とかして欲しいということで、「まちづくり委員会」が26地区全部でできているが、仰るとおり、そこに子どもの視点、子ども達のことを見るPTAや子ども会が入っているが、子ども自身は入っていないわけで、そこは確かに課題である。

あと、内向化している問題にどうやって地域の側からアプローチしていくのか、接点となる場所を作っていくことのような気はするが難しい問題である。また、先ほどSNSの問題が出ていたが、児童相談所や警察から最近の状況をお聞かせ願いたい。

児童相談所の状況だが、昨年度の相談件数は約 1,200 件。その中で話題になるのが虐待の問題で、467 件、前年度 13%の増。そのうち小田原市は 278 件で件数全体の約 6 割が小田原となっている。これは前年度比で言うと 15%伸びていて、さらに今日のテーマになっている 14 歳以上、中学生以上の割合が約 2 割と、要は、小学生以下の割合が 80%、それ以外の中高生が 20%となっている。昨年度も月に 50 件以上通報が来たことも何回かはあるが、今年度はものすごい勢いで増えている。今年の 4 月からはこのような状況が止まらず 3 か月で 150 件を超えている。今月も、今日現在で 20 件に達するので 50 件を超えてしまうというような状態で、職員が 1 名増になったが 50 時間超えの残業が何人もいる状況。

1,200 件もある場合、467 件と件数を言ったが 1 回で終わるわけがなく、1 件でも、多いと 100 回以上関わることもある。目黒の幼児が亡くなった事件、これは児童相談所の不手際がいろいろと指摘を受けたが、それもあつてか通報が増えているのではないかと思う。通勤途中で子どもと親が登校しているときに親が子どもを蹴飛ばしながら学校に行かせていたという通報内容。しかし、これだけでは特定できない。多分あの場所ならあの小学校だろうな、そんな感じの親はいないかと内々で確認していくと大体該当者が出てくる。道路の真ん中で 1、2 歳の幼児が遊んでいて、タクシーの運転手が停めて保護して自宅まで送った。それを見ていた人が通報した。そういうところまで突き止めなくてはいけない。

虐待では、467 件のうち 300 件が心理的虐待で、その大多数は夫婦喧嘩である。夫婦喧嘩では当事者である夫か妻が 110 番通報する。そこに子どもがいると警察から必ず児童相談所に通告文書が来るが、その件数が増えているのが問題である。何が言いたいかというと、そうした環境でまともに子どもが育つかということだ。その子が小学生、中学生、高校生になっていくわけである。自分が親になったとき、何をモデルとして子育てをするかということ、これは意識しているしていないに関係なく、自分がどう育てられたかが必ずバックボーンになる。まともに育てられていない子どもが大人になり親になる。親になるということは子育てをする。またその子どもが同じような環境で育っていくとなると、倍々までとは言わないが、連鎖という言葉を使うが、そういう状態が非常に危惧される。

地域で支えるという意味では、究極のケースは児童相談所が介入して警察と協力しているが、ネグレクトや、子どもをちゃんと見ていない、ご飯を食べさせていないというケースでも、介入して子どもを引き上げるのは難しい。日本は親権が非常に強く親権者が同意しないと勝てないので、裁判に持っていくこともある。今、小田原でも親の同意が得られないため、家庭裁判所に申し立てる準備をしているケースがある。

ネグレクトは大きな問題で、愛着関係、愛着障害、乳幼児期の人間関係を作る最初の関係、極端にいうと母子関係、ここが成立してないで大人になって友達とうまくやれるわけがない。これが発達障害などとして出てきてしまう。そういうものをどう支えクリアしていくのか。

子ども達に対して色々な活動をやって素晴らしいと思うが、そこから漏れてしまう子が必ずいるわけで、その子を救っていかないといけない。経済的に余裕のある家、もうちょっと言うと学力のある家庭はそこそこいく。でも、そうではない子、例えば、今、小中学校では塾へ行く子はかなりいるが、経済的な問題も含めネグレクト系の家で塾に行かせている家はない。そうなるとう学力が上がるわけがなく、悪循環が繰り返されてしまうのが現実。

しかし、そういう家庭でも親も含め関わってほしくないと思う人達も多い。見方を変えると関わってもらってプラスの経験を持ってない。重箱の隅を突っつかれて、あんたのところはどうしようもないと言われていたような関わり方になっている。そうではない関わり方を考えないと、地域で支えていく環境づくりはできない。児童相談所で関わるケースは、人口比でいっても数パーセントとごくわずかだが、何とかしなくてはならない。

今言ってきたのは、予防的なことをしっかりやらないと、子どもはどんどん成長して大人になる。早い段階からの予防が大事だということ。また、ほかに気を付けないといけない問題は、それほど多くはないが10代の出産。我々は育てられないと思うのだが、自分達は平気、ちゃんと育てると主張する。10代の妊娠全てが問題ではないが、リスクが高い。妊娠届が出れば保健師が特定妊婦という呼び方をする。その多くはもともと課題のある者達で、その子達が低年齢で出産することになるわけで、それらも気にしていかないといけない。乳児院と一時保護所は最近空いていることがない、定員オーバーで神奈川県トップの状態となっている。

また、早期の対処療法として、昨年足柄高校の生徒を対象に、児相と民間団体がタイアップしてデートDVの研修を実施した。民間の団体に講師を依頼し「暴力でない人間関係づくり」をテーマに行った。デートDVは必ず暴力が伴い、そこに望まない妊娠が結果として出てくる。先ほどからのSNSがどうのということも当然あるが、もっと抜本的なところを見ないと問題解決は難しい。何で暴力を介した関係性しか成立しないのか。逆に暴力を使わない関係性はどういうことなのか、ということを考えてもらうきっかけづくりが必要。去年は1校だけだったが、今年は西湘高校が取り組むような話もあり、対処療法、予防的取組の両方をやっついていかないといけない。大きなお世話をどれだけやっついていくのか、その底辺をどのへんに置くのか、児童相談所という特殊な環境から見るとその点が課題である。

会 長

目黒の事件のように、父親がどうしてあんなことをしたのか考えると、委員が言うようなことがあったと考えないと理解できない。そういう意味では、幼いときに満ち足りた関係の中で、育ち得られる人間関係の作り方ができないまま成人していくことの怖さというか、新幹線の事件もそうですけど本当にぞっとする。

次に警察の状況もお聞かせ願いたい。

小林委員

まず正直言って、DVに係る事件は家庭環境が悪い、両親が揃って塾に通っているような子が小田原署管内で事件を起こしたということはずまない。家庭環境や貧困、そういうものがベースとしてあることが大きい。また、親が非常に悪い人が多い。毎日、夫婦喧嘩して110番してくる。赤ちゃんがいれば心理的虐待ということで児童相談所に通報する。そのため300件という件数になってしまう。兄弟がいればその分も通報件数になる。よく休む子は親が働いてなかったりする貧困の問題が多く、一朝一夕には解決できないケースが多い。

少年事件で言うと、間違いなくSNSが絡んでいる。まず捜査でやることはSNS関係の照会から入ることがほとんど。15年前に別の署の少年係にいた時には、「あの学校のあの番長は大人しくしている」、非行少年をターゲットにして「あいつは最近大人しくしている」、という話ばかりだったが、最近はそういう話は一切ない。非行少年は夜中に出回ったりもしているが、なかなか表には出てこないし、表立って喧嘩もしない。

それよりSNSの関係で一番困るのは、女の子がSNSで知り合っ
ての猥褻被害が多い。小学4、5年生くらいの女の子から対象となる
が、そのくらいの子どもは、SNSも遊び半分で単に友達が欲しい感
覚で遊んでいる。最初は優しく話を聞いてくれるおじさんやお兄さん
と話していて、そのうち仲良くなると、「ちょっと胸の写真を送ってく
れない」とか言われて、子どもだからわけも分からず写真を撮って送
ったら、脅かされて「もっと送らなければお母さんに言うぞ」とか、
それが女子高生の場合は「拡散するぞ」と脅かされてしまう。今の子
は問題意識もなく平気で送ってしまう。中高校生は写真を撮って簡単
に送って、拡散して、皆にばら撒くぞと脅かされ無限ループにはまっ
てしまう。そういうことが小学生ぐらいから起こり得るので、本当に
困った時代になった。

先日も、高校生が拡散すると脅かされて相談に来たが、ネット社会
なので近所の者とやっているわけではなく、調べた結果、新潟の人間
で、朝早く新潟まで行き逮捕した。今は、インターネットのサイバー
パトロールもやっているが、そのパトロールでも追いつかない。少年
係の捜査員は事務が処理しきれず、毎日遅くまで残業している。

今後どうしたら良いか、一朝一夕では解決できない。本当のネット
の怖さ、SNSは一度発信したら回収は不可能、そういう怖さを、少
学校の低学年から地道に教え込んでいかないと間に合わない。さらに、
問題のある親も多く、子どもをほったらかして遊びに行ったり、そう
いう環境で育った子が良い子に育つというのは難しい。大きく捉え
ると貧困とかそういう問題なのかと思う。親がどこか行ってしまい
面倒見てくれる人がいない。そうなれば、悪い友達と遊ぶかネット
で悪い人達と繋がるとかになってしまう。根本的な解決は難しいが、
孤立している人達をフォローしてくれるような居場所作りが必要で
ある。

以前、女の子が変な男と知り合い猥褻なことをされた事件があり、
よくよく聞くと、学校で友達がいらない、家庭でも孤立していて引き
こもりのようになっている。しかし、一人では生きていけない。そ
うなると、誰でもいいからネットで繋がりをもちたい。相手も女の
子だったらネット上でいくらでも優しい言葉をかけてくれる。この
人は自分の言うことを聴いてくれる人だということから被害に遭
うという無限ループになっている。ネット以外に何か居場所があれば、
そういうことにならないで済むのかなとも思うが、言うのは簡
単だがなかなか難しい。

会 長

皆さんのお話は構造的には同じ。サイバーパトロールをやっているも追いつかないという状況の中、児相の対応件数も増えている。結局、家庭の在り方や夫婦とか家族の色々なことで、子どもが孤立していく状況に拍車をかけている。

残り時間も少ないが、これらについて何かあればお願いしたい。

和田委員

これまでの皆さんの話を聞いてまさにそうだなと感じている。教育委員会で幼稚園から小中学校まで回っている中で感じたところを申し上げたい。

子ども達の問題は学校に来るが、実際は親の問題であったり様々な複合的な要素を含んでいて、とても学校だけでは解決しない。親が精神疾患を患っているため医療機関と繋がらなくてはいけないとか、貧困の問題で生活保護を受給していることから福祉部門と繋がらなくてはいけないとか、学校だけで、教育委員会だけでは解決できないという現実を共有しなくてはならない。この問題は学校まかせ、教育委員会まかせと言われては解決できない。

たまたま、これは貧困の問題に繋がるが、座間の事件をきっかけに、県の提案事業として、包括的支援の在り方の会議を7月30日に行う。

座間市は、あの事件をきっかけに「断わらない相談」をテーマでやっている。これまでは、相談を持ち込まれたら、ここの領域までは自分のところで、それ以外は別の部署に行ってくれと、そうすると相談者は面倒くさくなってしまう。別の部署に行っても「うちの担当ではない」と、また別の部署へ回される。この断わらない相談というのは、それぞれの専門分野の連携管理で、持ち込まれた問題を持ち込まれたところが責任をもって繋いで行く。繋いだ先がもしできなかつたら、最初に持ち込まれたところが責任をもって次へと繋いでいく。たらい回しにされると相談者が疲れてしまう。このような受け止める組織を作ることは緊急の課題だと思う。

それから、先ほど自治会の方が、不登校や引きこもりの経験者が20代で凶悪事件に繋がっているのではという話について、ほかの委員も発言していたが、居場所を持っているか持っていないかという問題だと思う。発達障害だからとか、不登校だから、引きこもりだから事件を起こしたのではなく、我々支援している立場から言うと、不登校や引きこもりになっている人の自殺はない。「学校行け、学校行け」と追い出された子が、結局行き場を失って自殺する。不登校が良いか悪いかは別として、受け入れてくれる場所を持っている人の場合は、自殺

に至らないというデータもある。事柄の是非を論じるよりも、まずは命というステージに立って居場所を確保するということが大切ではないか。親が教育放棄してる、居場所を失っている。そうすると子どもは自分で命を断つか、凶悪犯罪等に走るかどちらかに行かざるを得ない。居場所づくりは大変大事な要素ではないかと思う。我々NPOではそうしたことをやっているが、それ以上に地域コミュニティが居場所になっていくこと、多様性が共有する社会の中で居場所を持つことが一番理想ではないか。いわゆるスクールコミュニティ構想とか、そういったコミュニティの力を、皆様の専門分野と連携することが良い。

そういう意味では青少年問題協議会の役割は大きい。これだけ多様な分野の方々がいるわけだから、例えば、我々に持ち込まれた問題を、学校や児童相談所、警察などに繋げていくような仕組みができれば良い。

会 長

今回は、2022年に始まる成人年齢の引き下げに向けてという問題意識から始まり、青少年に対するこれまでの活動、現在の取り組み、課題等について発言いただいた。社会性をもって成人していく途上には、家庭であったり、学校や地域であったり、子ども同士のコミュニケーションの問題など、多くの問題が横たわっていて、成人式をどう開催するかという話以前の質的な問題に、どうアプローチしていくかが最大の課題だと共有できた。

SNSの問題、貧困やネグレクト、虐待とか、根本的な問題が広がっている子ども達を取り巻く環境を見ると、領域が広すぎて呆然としてしまうが、基本的には一つひとつのケースに向き合っていける体制を、地域がどの程度持つていけるかに尽きる。今日もいくつか、受け皿としての地域コミュニティ、家庭との関わりとかヒントが出ている。次回は、今日のやり取りを整理した上で投げ掛けをし、何らかのアウトプットに繋げ、皆様方の活動の役立てるようにしたい。

今日は、そのような感じで議論は閉めたいと思うが、最後に副会長何かあれば。

橋本副会長

皆さんの話を伺い本当に大変な問題と感じた。本日私が感じたことは三つある。一つは、SNSを含めて人間の弱さとか甘さを狙った人達、これを抑えることはできないし、対抗するには自分で守るしかない。

しかし、個人では難しい。団体や学校、地域や行政等で何らかの対策をしていく。また、そうしたことを発信することが大事。

先日の新幹線の殺傷事件も、後で聞いたら車掌さんが座っている椅子が取れて防御できた。だったら、こういうときには椅子が外せますと事前に話しておけば犯罪の抑制に少しは繋がる。我々も、もしこういう時にはこういうことができるということを発信していきたい。次に、色々な意味で信頼関係がなくなっていることで、特に家庭の中の親子関係とかその辺をどうするのか。地域としてどう支えていくのかということ。

最後に、地域コミュニティが小田原では盛んだが、私の所属する子ども会や自治会、老人会でも、人が減ったり役員のみ手が減っている。そういう状況から、これまでのように、子ども会は子ども会だけ、自治会は自治会の役員だけでなく、自治会も含めて皆で一緒にやっていくことが必要な時代になってきたと感じている。

会 長

今回は、今日の議論を整理して次の段階の議論を考えている。また、今日の議論の内容について、それぞれの団体等の活動でどんなことができるか考えていただき、次回、意見交換をお願いしたい。その他について、事務局から何かあるか。

(3) その他

事務局

小田原市教育委員会から「小田原市いじめ問題対策連絡会」委員1名の推薦依頼があった。推薦締め切りが6月中であったため、事務局判断により、橋本副会長にお声を掛けご快諾いただいたので、委員として報告させていただいた。

その他、卓上配布物について青少年課長より説明。

(委員了承)

会 長

以上で青少年問題協議会を閉会とさせていただく。
本日は長時間に渡りお疲れさまでした。